

## 巻頭言 「自由な思い」

宇野 元

アメリカの詩人、エミリー・ディキンソン（1830-86）は、ニュー・イングランドの町、アマーストで生まれ、その地で亡くなりました。ごく限られた領域の中で生涯を送った人です。詩人としても、生前はまったく世に知られることがありませんでした。しかし、小さな世界の中でたたためられた彼女の言葉は、大きく翼を伸ばして、なんと自由に羽ばたくことでしょう。

喜びとは出かけること  
内陸に住む心が海へ  
家々を過ぎて——岬を過ぎて——  
深い永遠の中へ——

‘Exultation is the going’

年上の友人 T さんが送ってくれた詩「風に乗る」を紹介しましょう。大正と昭和の詩人、竹友藻風が紡ぎだしたものです。

最初の言葉を記します。5月から6月初め、薔薇が咲く時期の詩ですが、これを口ずさむと、うきうきした気持ちになります。冬のさなかに、青空の下で口ずさんでも一向に構わないでしょう。例えば、芦屋教会のすぐ近く、白橋の街灯の傍らに立って。

風に乗る わが心  
はつ夏の 窓を越ゆ

自由な思いが、ありふれた奇跡のように与えられます。風吹きすさぶニューイングランドの冬にも、それより穏やかではあってもやはり寒さが厳しい折にも、私たちの心の窓がひらかれます。私たちは越えて出ることができます。思えば、この息苦しい時期にも。

そして神の国が存在しています。すなわち、罪のゆるし、私たちを押さえつける力からの解放が与えられています。私たちが健やかに生きるために。外に出て、深呼吸することができるように。私たち人間は神の国に向けて創られています。イエスが伴い連れ出してくれます。